離も良好であった．運動負荷量と洗い出し率の間には正の相関 (r=0.61) があった．本法は冠動脈疾患の定量的評価法として，優れた方法であると結論された．

9. 位相ヒストグラムによるWPW症候群の定量的解析

谷口　充　中嶋　憲一　分校　久志
滝　淳一　南部　一郎　四位例　靖
利波　紀久　久田　欣一　（金沢大・核）
向　恵一　三崎　拓郎　（同・一外）

位相解析において従来の視覚的イメージに加えて，位相ヒストグラムによる定量的解析を行い，WPW症候群の診断率の改善を計り，心電図とも対比検討した．方法は位相イメージにて，右および左心室に関心領域(ROI)を設定し各ROIの最大値，最小値，平均，標準偏差，左右の平均の差および最小値の差，両心室の位相範囲を求めた．正常人とWPW症候群の鑑別には，最小値，標準偏差，平均の差，最小値の差，範囲が有用であった．また範囲とQRS幅との相関は，r=0.688 (p<0.001) と良好であった．

10. ^{123}I-IMPによるFVO (Frontoverticoccipital) Scan

阿隅　政彦　竹原　康雄　金子　昌生
畠山　真行　加藤　俊彦　沓掛　康道
（浜松医大・放）
北沢　幸保　杉江　義男　（同・放部）

^{123}I-IMPによる頭部SPECTでは，患者の体軸のまわりにガンマカメラを360°回転させる方法が一般的だが，前頭部，頭頂部，後頭部方向に180°回転させるFVO Scanを考案した．このFVO Scanにより，患者の肩に邪魔されず，カメラを患者に近づけることが可能となり，かつ大脳半球を対称的にScanすることができる．従来の方法とFVO Scanを基礎的，臨床的に比較検討し，FVO Scanでは(1)分解能が向上．(2)システム感度が上昇．(3)吸収補正しなくても，大脳半球を対称的にScanするため両半球の血流分布を比較するのに適する．(4)180°回転では深部の画像がひずむといわれているが，全般的にはFVO Scanは臨床的に有用であるという印象を得た．

11. 脳腫瘍の^{123}I-IMP (N-イソプロピル-p-ヨードアンフェタミン)像，Gd-MRI像，造影CT像の比較検討

田所　匡典　浅井　英彰　牧野　直樹
石垣　武男　佐久間貞行　（名大・放）

原発性，転移性脳腫瘍患者11例に^{123}I-IMP静注投与によるSPECT，造影CT，MRIを，Gd-DTPA造影MRIを8例に施行し比較検討した．腫瘍部へのIMP集積は30分で3例，5時間で3例みられた．Gd-MRIでは5例造影効果を認め，1例を除き造影CTと一致した．Gd-MRIと造影CTはよく相関したが，IMP集積とGd-MRI，造影CTでの造影効果に明らかな相関はなく腫瘍へのIMP集積はヨード系造影剤やGd-DTPAの場合のような血管構築に起因するわけではなく，他の異なる機序が関与していることが示唆された．

12. てんかん患者の局所脳血流(^{123}I-IMP静注法による検討)

関　宏恭　松田　博史　隅屋　寿
辻　志郎　大場　洋　寺田　一志
久田　欣一　（金沢大・核）

従来てんかんの診断は臨床症状と脳波所見を基盤としてなされてきた．今回われわれはてんかん患者の発作間歇期における焦点の血流状態を評価し，焦点の局在診断に関して脳波所見と比較する目的で，20例のてんかん患者(男10名，女10名，平均年齢29歳)に^{123}I-IMPを投与しSPECTによる脳血流断層像を得た．いずれも発作間歇期である．20例中5例が正常像を示した．他は脳組織変形の1例を除いては，いずれも局所性あるいはびまん性低灌流を示した．20例中9例で片側局所性低灌流を示し，低灌流域が両側半球にわたったものは4例であった．病変の局在についてIMPと脳波とが共通所見を有した例は8例であり，今後さらに検討を要するものと思われる．

Presented by Medical*Online